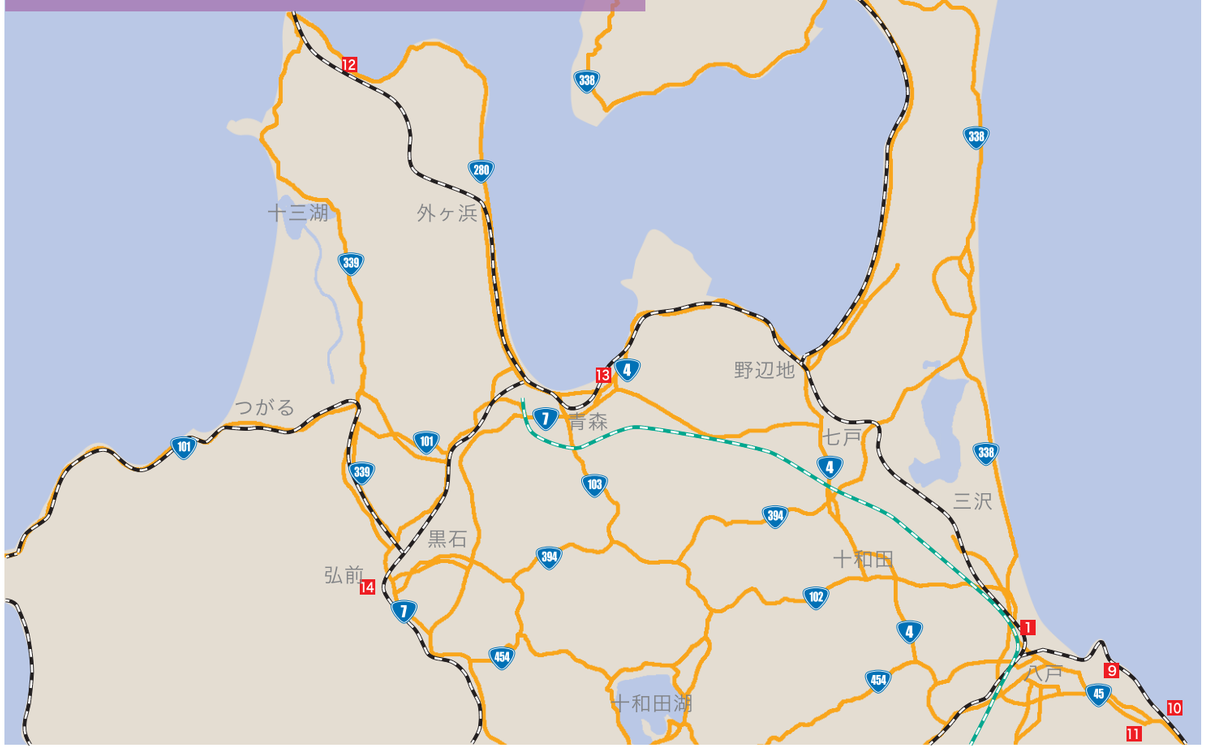
# 義経伝説

日本史上、最も有名な武将の一人、源義経。「吾妻鏡」によると、義経は兄・源頼朝に追われ、平泉の奥州藤原氏3代秀衡のもとへのがれたが、秀衡が亡くなると、4代泰衡の攻撃を受け、妻・娘とともに高舘にあった持仏堂で悲運の最期を遂げたとされています。

しかし、亡くなったのは影武者で、義経は密かに平泉から逃れ、北へ向かい、大陸へ渡ったとされる「源義経北行伝説」があります。東北各地には、それを裏付けるような伝説が数多く伝えられており、八戸市内にも、伝説を裏づける多くの地名や品々が残っています。



## 小田八幡宮 1

北へ逃れた義経は、八戸に上陸後、小田八幡宮近くの高館に住んだといわれています。小田八幡宮は高館山の麓にあり、義経の一行が写経したと言われている「大般若経」が保存されています。境内には義経が立てたと伝えられる毘沙門堂や義経堂があります。また義経が、この周辺に小さな田んぼを段々に開いたことから、「小田(こだ)」と命名されたといわれています。

## 矢止めの清水 2

義経がどこまで遠くへ矢を飛ばすことができるか弁慶に命じると、高館から遥か遠くの馬淵川を超

えた場所(売市)へ届いたといわれます。その矢を抜くと、水がわき出たことから、「矢止めの清水」といわれています。

## 三八城神社の弁慶石 3

三八城神社の境内に、「弁慶石」と呼ばれる岩があります。

石のところどころが、人間の大きな足型のようにくぼんでおり、力自慢の弁慶が岩にしるした足型だといわれています。かつては「義経石」と言われる石もあったらしく、現在は行方不明となっています。

## おがみ神社 4

この神社には、源義経北行伝説を記した「類家稲荷大明神縁起」が伝わっています。

おがみ神社は、義経と一緒に八戸まで来た正妻(京都の公家、久我大臣の姫)の亡骸を葬った場所とされ、縁起とともに久我大臣の姫が使用していたとされる手鏡が残されています。

## 長者山(新羅神社) 5

義経が藤原秀衡死後、脱出先を探るため、家臣の板橋長治を八戸に派遣したといわれています。板橋は、市中心部の小高い丘に居を構えたと言われており、当初は長治山と呼ばれ、現在は、長者山新羅神社となっています。周辺には、「板橋」という地名も残されています。

また新羅神社の男坂の石段は、弁慶が運んだ力石だという伝説もあります。

## 藤ヶ森稲荷神社 6

「類家稲荷大明神縁起」はこの神社についての縁起とされています。類家稲荷(藤ヶ森稲荷神社)は、建久2年(1191)の京の藤が森から観請されました。義経が家来の常陸坊を京へ派遣し、京都の稲荷社から持ってきた土を埋め、稲荷のほこらを作ったといわれています。

## 帽子屋敷 7

八戸市類家には「帽子(ぼっち)屋敷」という字が最近までありました。由来として、高館から義経が、藤ヶ森稲荷神社に来た際に、烏帽子や狩衣を掛けておいたところから、「帽子屋敷」と呼ばれました。現在は、芭蕉堂公園のあたりとされています。

## 館越 8

源治囲内を後にした義経は、市内を流れる新井田川をさかのぼり、現在、館越山と呼ばれている場所に居を構えたといわれています。この山の由来は、後に義経が高館に引越しする際に、館を引越ししたところという意味で、このようになったと言われています。

## 源氏囲内(三嶋神社) 9

八戸市白銀に残る「源氏囲内」という地名は、「源氏の屋敷」との意味だったといわれ、種差海岸に上陸後、義経が一時匿われていた場所であることから、この名が付いたといわれています。義経一行が舘越に居を移す前に法官氏の世話で住んでいたところであるといわれ、現在も「法官(ほうがん)」という苗字の住民がいます。法官という姓は、義経が一行に世話を焼いてくれた者に「今後、判官と名乗るがよい」と申し渡したが、判官と名乗るのは差し障りがあるというので法官と改姓したといわれています。

## 熊野神社(種差海岸) 10

海路を脱出した義経の八戸の上陸地点といわれています。現在の種差海岸から数百メートル山手のところにある熊野神社は、義経が上陸後休憩した場所といわれています。

## 寺下観音 11

寺下観音に、弁慶が書写したと伝えられる『大般若経』六百巻のうちが巻五七六が遺されています。また、燈明堂跡に登る参道には、「弁慶の一刀石」「牛若弁慶相撲取り石」という岩があります。

## 義経寺 12
## 野内貴船神社 13
## 圓明寺 14